

I 分野 第2分科会

人権感覚の素地を培う保育・教育

司会者 稲岡 昇太 色波 亨

記録者 株本 和則 中島 美聡

報告者Ⅰ 桂 有香（東播磨）

「輝く笑顔 育ち合う仲間

～豊かな体験と人との関わりを
通して～」

報告者Ⅱ 淡路 美保（西播磨）

「友だちの気持ちに寄り添い、共に
育ち合う集団づくりをめざして」

報告者Ⅲ 石井 ますみ（丹波）

「五感で四季の移り変わりを感じ、自
然と共にたくましく育つ子

～自分らしさを大切にしながら、友
だちと協力して遊びや生活を進めて
いこう～

研究討議の概要

<報告Ⅰについて>

司会 発表を聞いて感じたことや自尊感情が高まったと感じた事例などをグループ討議で話し合ってほしい。

Aグループ Aグループには認定こども園、幼稚園、小学校の先生がいた。小学校の先生は、幼稚園などで異年齢交流をしていることに驚いた。保育現場では異年齢活動に対して違和感はないが、職場によって感じ方の違いがあった。また、「ポカポカ言葉」「チクチク言葉」も園によっては「ふわふわ言葉」「あったか言葉」と違う名前で取り組んでいた。良い取り組みだと感じ、今後取り組んでいきたいと感じた。

Bグループ Bグループは保育現場の職員。あいさつの事例を聞き、保護者に褒めるところが分からないという保育の悩みや交流などについて話し合った。

Cグループ Cグループは小学校、保育園、市の職員がいた。自尊感情を高めるにはどうすればよいのか。高まったと何を基準に判断するのか、高まっていることが数字で見えないため、どういう姿なのか判断していく必要がある。保護者との関係も大事なのではないかという意見が出た。家庭でどれだけ自尊感情を高められるか、マイナスの言葉のシャワーを浴びている子ども達のことを考えると、日頃から家庭との

連携が必要であると感じる。

Dグループ 保育園、小学校など様々な意見を聞く事ができた。保育園の先生からは、0歳児、乳児期からの愛着関係を大切にすることで自尊感情を養うことが始まっているのではないかと。幼児期からやりたいことを存分にできる環境が大事。小学校でも異年齢活動を取り入れているが、幼児期から異年齢で活動できることはすごい。また、「褒め言葉シャワー」に取り組んでいる小学校がある。「名人」という言葉掛けはとても良い取り組みだと感じる。しかし、どの基準で誰が「名人」と決めているのか知りたい。

報告者Ⅰ 毎朝、あいさつ立ち番をしている園長の判断で決めている。親から離れると声が大きくなる。保護者と一緒だと小さくなる（はずかしい？）傾向がある。小さな声でも頑張っている園児を「名人」に認定する。

司会 小学校でしていた「褒め言葉シャワー」とは具体的にどういうものなのか、教えてほしい。

Dグループ 朝の会で指定した児童の良い点を帰りの会で発表する。その日一日の中での児童に注目し、児童たちと担任で出し合う。

<報告Ⅱについて>

参加者 A児とB児の関わりについて、これまでの関係はどうだったのか。また、A児に対する声かけはどうか。

報告者Ⅱ B児は思ったことをすぐに言ってしまう。それに対してA児が疑問に感じることもあったようだ。丁寧にかかわろうと思った。2学期になると、形式的な謝罪ではなく、B児は自ら気が付いて自分の思いを言葉にするようになった。

司会 グループ討議で話し合ってほしい。

Eグループ 「ごめんね」「いいよ」という場面はよく見る風景。少人数の園では、話し合う時間を持つことができる。折り合いの付け方を学ばせるようにしている。相手の気持ちをしっかり受け入れることも大事。思ってもないのにいいよと言うこともある。小学校につなげていくための経験も大事。

Fグループ 形式的な謝罪があるということに共感を受けた。相手の気持ちを理解するためにアサーショントレーニングに取り組んでいる。

のびた（おひとよし、自分を大切にしない）、ジャイアン（自分勝手）、しずかちゃん（約束守る、自分も友達も大切）の立場でロールプレイする。分かりやすく理解を深めるために取り組んでいる。

G グループ 異年齢の良さはつながりができ、お互い認め合えること。気をつけないといけないことは、小学校では一番下の学年になる。これまで培ってきたものを壊さないようにしなければならない。自尊感情について日々高めていかなければならない。様々な性格の子どもが様々な環境で育ってきている。同じ環境で育つ体験も大事にしていく必要がある。子ども達が発した言葉に対して、これだと思った時に先生が声かけしていかなければならないと気付かされた。

H グループ 「変じゃないよ」について先生がうまく取り上げて指導された。トラブルが起こった時に対応することになるが、年齢に応じた対応が大切、双方の思いを聞いたうえで、何に対しての「ごめん」「いいよ」なのか突き詰めることが大事。状況、発達段階に応じた対応が必要。この事例において、保護者にどのように伝えたのか。キラットさんを見つけようで運動会の事例を取り上げられたが、友達だけではなく、先生もというのが子どもから出たのがすごい。（小学校教師だが）うれしい。そんな雰囲気がいい。

報告者Ⅱ 保護者へは、送迎時に伝える。

I グループ 電車ごっこでぶつかった時、ある母親は電車の方を心配した。思いやりの心が育つ。低年齢のうちから保育者がしっかり子どもに伝えていくことで相手の気持ち、いやな気持ち分かるのではないかな。しっかり子どもの姿を見ていないと、声かけのタイミングがわからない。実態を把握し、職員で協力し合って、そのクラスを見てもらえるような連携を図ることが必要。

司会者 中学校になると、トラブルの収め方、世の中での過ごし方を身につけてくる。これは小学校の先生と相談したり、小学校の時に幼稚園の先生と相談したりしてきたから。校区内7校園所が集まって相談したり、SCを加えてメンタル的な話をしたりしている。自尊感情から他者のことを考える。その結果培ってきたものが自分に返ってくる。幼児教育に携わっている先

生の目は研ぎ澄まされている。先生方の力に頼らないといけない部分がある。保護者とうまく連携していくかがこれからの課題。

<報告Ⅲについて>

司会 グループ討議にしたい。

Cグループ 自然豊かな所と街中では活動の仕方が違うと思うが、自然が豊富で命に触れられる経験は大事。異年齢交流（保育）ではどの学年、どの組み合わせかが大事。3歳児と5歳児の交流の間、4歳児はどうするのか、ねらいを明確にし、交流が良い経験の場となるような活動にしていけることが大切と感じた。

Gグループ 3～5歳児が異年齢で活動していく中で、5歳がしていることを、4歳、3歳が見て、自分たちが5歳児になった時に同じようにすることは、年少児にとっての憧れになるなど良いと思う。命の大切さということから、サワガニが無事に川に帰れたのか。今の時期は園庭にバッタやカマキリがいるが、飼うとなると餌がいるが、どうしているのか。ムッレについてももう少し詳しく聞きたい。

報告者Ⅲ 捕った時はバスで行ったため、還す時は保育者が代表して還しに行った。2～3週間飼育していた。バッタやカマキリは、1日程度飼育ケースに入れて飼育し、草むらに還すようにしている。

参加者 ムッレは自然の妖精であり、媒体である。動物、自然を守り、人権を守るところまで広げられたらいい。

Dグループ 自然体験活動については難しいという印象。生き物は別の生き物を犠牲にして生きている。命は大切と口で言うだけでなく、体験をしないと実感できない。どう子ども達に浸透させていくか、指導者の工夫が必要になってくるのではないかな。子どもたちの置かれている社会環境が変わってきた。生き物に近寄りたがらない、汚がる、ばい菌に対しての意識が過剰、持ってきた生き物を何度も死なせてしまう子どもが増えた。身の回りの環境の変化、親の世代の経験が昔と違ってきている。変化に対応して、子ども達に伝えていくことが大切。

Eグループ 自然愛護は必要だが、せめぎあいが難しい。死んでしまった生き物に「先生、電池入れて」という園児もいる。命の大切さを実感させることが必要。自然豊かだから何でも体

験しているとは限らない。意図的に環境を構成していくことも必要なのではないか。

司会 飼育育成では命を尊重することを伝えないといけない。発達段階によってデリケートな取組ではあるが、先生も理解したうえで、つながりあるプログラミングができたらい。しかし、現実には念入りにコミュニケーションが図れないのが現状。園からの要望と中学校の現状のギャップもある。ふれあうということが目標となっていると思う。どんな提供をしていくのが難しい。保育士の先生方は虫を扱えるのが素晴らしい。最近の子ども、大人は天敵が表れたような反応をする。

<総括>

まず、就学前教育の先生方を尊敬する。勤務時間の適正化と言いながらも、日々あれもこれもされている。日案も大事だが、目の前にはもっと大事なことがある。初めて幼稚園勤務をしてその大変さを実感した。

小学1年生と5歳児では大きな違いがある。5歳児と4歳児でもそう。先生方の努力の賜である。様々な人との関わりの中で、受け入れられ、認められ、頼られる経験が自尊感情、自己有用感を高める実践事例だった。自分大好き、友達大好きという雰囲気をつくることが大事である。

本園では、年度当初保護者も子どももあいさつをあまりしなかった。名人認定すると保護者に啓発したら、とたんに大きな声が出るようになった。保護者への啓発が一番。あいさつスパー名人までつくることになった。

次に、人とのつながりを大切にする事例として、異年次交流、ふれあい活動、流れ星広場があった。人との関わりの中で、教師が人権をどのように大切にしているか、教師間で共有することが必要である。声掛け、パイプ役、コーディネートなど意図的な仕掛けを大切にしたい。

子どもの思いや考えを聞く、認め合う関係作りに取り組んでいる事例として、変じゃないよ、キラットさんの取組があった。相手の気持ちを理解する言動や教師のきめ細かい指導援助が適切かどうか。その瞬間やタイミングを逃さないことである。

自然体験活動、命を大切にする事例があった。子どもたちが自ら生き物を捕る体験ができる

環境はなかなかない。恵まれた環境を上手に活用すべき。そうでない場合も教師が意図的に設定することが必要になる。

幼児教育は人権教育の基本と考える。子どもにとっては初めての集団生活であり、子どもを主体にし、自分や友達を大切にする人間形成を行う場として意識をしっかりとっていかなければならない。

<今後の方向性と課題>

一昨年、こども園建設のため川西幼稚園児が川西小学校の一部を間借りして、1年間小学生と一緒に生活した。すると、児童や先生たちの眼差しがすごく優しくなった。竹馬、七夕、デカパン、ジャンボかるた、就学時健診時の5年生付き添いなど以前から交流していたので、いい交流がたくさんできた。幼・小相互の授業参観はいい情報交換になり、小学校への接続という意味でもとても効果があった。

2月の入学説明会の資料には、小学校までに身のまわりのことは自分でできるようにと謳ってある。朝の排便の習慣、整理整頓、あいさつ、返事、話す人を見てしっかり聞く、自分の名前の読み書き（縦横）など。また、体操服の着替えや休み時間のトイレ、給食などを素早くできるようにお願いしたいと……。

しかし、幼児教育は小学校への準備教育ではない。今後、園側が「アプローチカリキュラム」、小学校側が「スタートカリキュラム」を準備し、システムとして接続の基盤を整備することが求められている。

さらに、特別な支援が必要な子どもの数が年々増えてきている。職員間や保護者との連携、加配教諭のあり方、関係機関との情報共有など課題が山積している。子どもへの声かけ、その子への見守りや配慮についてどう関わっていくか、その質が問われている。

終わりに、大人社会のいじめが子どものいじめを助長している。「子どもは、社会を映す鏡」という言葉があるように、子どもたちは親や大人の背中を見て成長する。大人が変われば、子どもも変わる。そういう意味で保護者への啓発が大事で、その手段・方法も検討してほしい。

人権教育を推進するのは我々教師。人によって物差しは違うので、人権としての視点をもって子どもたちに関わっていきたい。